

飛驒地方における真宗の展開

—とくに白川郷の真宗寺院について—

森 岡 清 美

1. 白川郷への関心

昭和戦前戦中までの白川郷への大方の関心は、専ら大家族および大家族が居住する合掌造りの民家に注がれ、私の専門領域である社会学では、熱い目が大家族に集まった。最も著名なのは、高岡高等商業学校教授であった小山隆氏が、同僚の地理学者・小寺廉吉氏らとともに昭和7～11年の間、高岡から庄川を遡って五箇山・白川村の調査を毎年のように実施し、その成果を昭和8, 11, 12年とたて続けに発表したことである。隣接領域である民俗学では、江馬三枝子氏が昭和18年に『白川村の大家族』『飛驒の女たち』（ともに三国書房）の2著を公刊したことも、特筆に値しよう。

平成7年「白川郷文化フォーラム」の主題「嘉念坊道場」が問題になるのは、太平洋戦争後のことである。日本史家・笠原一男氏が昭和23年に発表した「中世村落における真宗教団の発展と一揆運動の必然性」（『歴史学研究』135号）なる論文がその先鞭をつけ、また、昭和28年に刊行された宗教民俗史家・堀一郎氏の『我國民間信仰史の研究』（創元社、とくに第七編第九章「道場形態と毛坊主の発生」）が、飛驒の毛坊主への関心を喚起した。私はこれらの先行論文に啓発されるとともに、児玉幸多氏が戦前に発掘した宝永3（1706）年6月の「白川郷二十一ヶ村草高寄帳」に登載された重立百姓と毛坊主との関連のなかに、飛驒真宗道場の特徴的な存在形態を探るべく、昭和30年7月25日～8月2日の間白川郷に足を踏み入れて、村役場では戸籍および生活資料調査を、鳩谷・平瀬・長瀬・中野では寺院調査を行った。これによって「飛驒の毛坊主」なる論文を書き上げ、昭和32年に公刊した。その後、昭和59年11月中旬、成城大学学生を引率して訪白し、荻町・平瀬で簡単な調査を試みたが、今回の報告の資料は大部分40年前の第1回訪白のさいに集めたものである。平瀬常徳寺住職高島正ご夫妻を始めとして、40年前にお世話になった方々は殆ど故人になられた。往時を思い、感謝の念を新たにするものである。

2. 戦国時代の飛驒の宗教

私は専門史家ではないが、掲出の演題を与えられたので、真宗の教線が伸びた戦国時代の、飛驒の宗教事情がどのようなものであったかについて、手短かに概観しておかなければならない。まず、天台・真言系を中心とする旧仏教勢力は、荘園制の崩壊と外護の在地武士団の没落によって、衰退の道を辿っていた。白川郷に近い美濃国郡上郡長滝寺(ちょうりゅうじ)は延暦寺の有力末寺で、美濃と飛驒に寺領と幾多の末寺をもっていたが、本山の衰微とともに経済的破局に瀕し、飛驒の末寺も禅宗・真宗等への転宗を余儀なくされていた。

他方、遅れて飛驒に進出した臨済・曹洞系の教線は、在地武士団の菩提寺・氏寺となり、その経済的社会的保護のもとに勢力を伸ばした。これにたいして真宗の教線は、武士団に支配される直接生産者層に足場を置いて浸透していった。

以上の概観のさいに権威とした笠原一男『一向一揆の研究』(山川出版社, 昭37)は、飛驒真宗の中心は二つ、大野郡白川郷の嘉念坊のちの照蓮寺と、吉城郡高原郷吉田村の常蓮寺(のちの越中八尾の聞名寺)であるとし、ともに親鸞の弟子善性の第2子といわれる善俊によって、13世紀初頭に基礎が築かれたという伝承を紹介している。これにたいして『高山別院史』上巻(真宗大谷派高山別院, 昭58)は、真宗の教線が飛驒に伸びてきたコースには幾様もあったと考えることを種々の角度から想定しており、こちらのほうが事実に近いのではないかと思われる。しかし、僅かな断片的史料と錯綜する伝承を組み合わせでの考察であるから、その暫定的結論は史家の今後の検討に委ねることとし、ここに紹介することもさし控えたい。

ただ、吉田の常蓮寺が白川の照蓮寺とともに嘉念坊善俊を開基とするという伝承について一言しておく。この説は、『斐太後風土記』が吉田村常蓮寺の段に引用した「寺説」および「旧事録」が伝えるものであって、八尾聞名寺の『越中国桐山聞名寺由来』には、「元伝教大師之流を汲」とか、「元亨三(1323)年之春飛州吉城郡高原郷吉田村へ越、一字建立ス」とかあるものの、嘉念坊善俊とかかわりのある伝承は一切書かれていない。また、嘉念坊側の『岷江記』にも、善俊の事跡として吉田聞名寺開基のことが語られていない。

『岷江記』には、白川郷中野村に寺基を定めた嘉念坊十世明心の長子十一世了教の次子に覚玄なる者があり、越中聞名寺に入寺したことから、「兄弟の寺とは成り侍りけり」と記されている。のみならず、覚玄の子覚従に十三世明了の娘を配嫁し、「此時も又兄弟の寺にてぞありし」という。そこで聞名寺の世代を点検すると、六世(照蓮寺側では四世という)に覚玄なる名が見える。ところが七世は(照蓮寺側でも)覚照であって覚従ではない。覚従はおそらく八世を嗣いだのであろう(照蓮寺并三福地治部卿由来記)。ともあれ、越中婦負郡を拠点としつつ、飛驒にもまとまった数の末寺道場をもつ聞名寺が、飛驒真宗の大勢力を束ねる嘉

念坊照蓮寺と縁組を結んだことは不思議ではない。善俊の高原郷布教は、このような後世の出来事と関連のある開創説話なのかもしれない。

3. 大野郡白川郷嘉念坊の成立と展開

鳩谷道場（のちの照蓮寺）開基善俊は、越前穴馬から石徹白を経て美濃国郡上郡白鳥に來たり、さらに「白山みち」を辿って建長年間（1249～55）白川郷鳩谷に來住し、のち飯島に移転したという。『岷江記』に、「郷中の者共何となく只珍らしきにめでゝ集り」「草に風をくはふるが如く人悉く集り国こぞりて帰依し、繁昌日々に弥増て終に真宗の道場と成れり。」とあるだけで、善俊がどのような教えを説いたか全く不詳である。ただ、白鳥來通寺に伝わるところによれば、白鳥逗留の善俊は圧倒的な天台宗の勢力下で外面に天台の宗風を守り、内面では真宗の弘通に努めていたところ、長滝寺の僧侶に見破られて迫害されかかったが、十一面觀音の夢告によって難を免れたという（『高山別院史』上巻）。善俊山伏説はこの伝承に依拠するのであろう。

『岷江記』が善俊について語った後、二世から第九世までを「善俊代々の事」と記しているのは、善俊とは嘉念坊道場の開基の名であるとともに、方便法身尊形の裏書に見える「白川善俊」同様、家名でもあることの証左である。また、開基善俊からただちに八世子の教信・明教（九世）兄弟の事跡に跳ぶことは、開基から七世くらいまでは、歴史的事実の断片が伝承の形でしか伝えられていない有史以前の時代に属することを暗示している。

教信と弟九世明教の事跡とは、在地領主内ヶ島一族の奇襲攻撃による敗戦と白川脱出である。まさにこの時期に加賀では一向衆が在地領主と戦い、ついにこれを撃滅するのであるが、白川郷では嘉念坊教団が奇襲攻撃を受けて潰えた。しかし、この事件を含む文明年間の末までに善俊門徒の道場が13カ所に建てられ、侮りえぬ勢力に成長していたことが分かる。内ヶ島一族との妥協が成立して白川郷に還り、飯島から中野に寺基を移して照蓮寺を称した十世明心（1531没）の代には、長享から明応末年まで（1487～1500）に16カ所、文龜から大永末年まで（1501～1527）に27カ所、照蓮寺門徒の道場が大野郡を中心として飛騨各地に続々と建てられ、空前絶後の一大躍進を遂げている。さらに天文から慶長まで（1532～1614、1587年に高山へ移転）に12カ所、道場が建てられていった。

話が現代に跳ぶが、昭和40年現在で飛騨の真宗寺院は109カ寺を数える。その8割が大谷派であるのは、これらの寺院のほとんどがもと照蓮寺末寺であり、照蓮寺が本願寺教如の側に付いたからである。残り2割が本願寺派であるのは、これらの寺院がもと八尾聞名寺の末寺であって、聞名寺が本願寺顯如の側に付いたゆえである。なぜ照蓮寺が東派となり聞名寺が西派となったか、『高山別院史』もまだ十分解明していない残された研究課題である。

4. 真宗布教の宗教基盤としての白山信仰

白川郷の村々が白山の東麓、庄川の縁に散在する地形から見ても、がんらい当地は白山信仰一色に染まっていたと考えられる。白山信仰の巡回祭司は天台宗長滝寺の僧徒たちであった。したがって、白山－天台信仰複合とでもいうべき宗教基盤に、真宗の布教が行われたことになる。『善俊光正録』巻二に、「其前〔善俊布教前〕白川、小鳥、川上の三庄は白山宮長滝寺の会下にして、天台の宗風に帰せしがども、其名ばかりにして誰導く智識もなく」とあり、『白川嘉念坊由来伝説聞頭物語記』に、「善俊……白川郷へ御越遊し、山中村々天台宗に候……有見无見共天台宗の安心も其名計にいのり祈禱、此世計りを極楽。うかうかと暮す白川にて……」とあるとおり、長滝寺の僧徒が村々を訪れても、祈禱によって現世利益を祈るにすぎなかった。

また『斐太後風土記』には、「元是川上郷中以西は、皆々美濃国郡上郡長滝寺の檀家にて、宿坊も末寺も、当郷にも数多有て、僧徒不絶来て法を説き、且本山越前国平泉寺の鎮守、白山社をも勧めし故、村々にて白山三社神を祭りしと也」とある。長滝寺の僧徒が村々を巡回するとき、白山社の鍵役の家を宿としたことであろう。白川郷では白山に近い15の部落で現に白山社が鎮守として奉祀されており、白川村では尾神、福島、秋町、木谷、御母衣、長瀬、野谷の7社を数える。(ただし、水没により、福島と秋町の2社は飛驒一宮水無神社の境内に移転し、尾神と野谷の2社は鳩谷の八幡神社に合祀された。)木谷、御母衣、長瀬の各白山社の由緒によれば、「此地白山の麓に在って神徳を崇敬すること厚し、登山峻峻常に参拝すること能わず、往昔ここに分祀を立てて当区の産土神とした」という(『白川村史』白川村、昭42)。

白川村の真宗寺院のなかでも、加須良の蓮受寺、鳩谷の法蓮寺、荻町の明善寺、長瀬の浄楽寺などは、もと天台宗であったといい、長滝寺の下寺が真宗に転じた縁起を伝えている。長滝寺の下寺とは、在所の白山社の鍵役あるいは別当に外ならなかったと思われる。

では、長滝寺の僧徒が祈禱によってもたらした白山信仰の現世利益とは、一体どのようなものであったか。『白川村史』はつぎのような現世利益と神罰の伝承例を記録している。

○白山の千蛇ヶ池のほとりに高く聳え立つ巨岩を「御宝ぐら」と呼んでいる。昔凶作で人民が苦しんでいた時、白山社の神主ト部長暢がこの巨岩に祈ったところ、忽ち岩が開いて瑞気が吹出し、麓に竹の花が咲いて実(笹実)が出来たので人々は餓死を免れたという。そこで、この名がつけられた。

○「保木脇村帰り雲山の麓也、内が嶋の時他には家数千軒もありけるよし、……白山権現の□罰にて城下まで一時に断絶せしとかや」(『白川奇談』)

5. 明心の伝承にみる白山信仰の超克

白山信仰の地盤に真宗が食いこむためには、真宗の功德が白山信仰に勝ることを示さなければならない。『岷江記』が照蓮寺十世明心の事跡として伝える説話のなかに、白山信仰の超克を印象づけようとするものが見出される。

○「明心或時申給はく、我久しくふもとに有て未白山の絶頂を知らず、一見の望ありとて白山に登り給ひけるに、石徹城の神司その余の人々大勢順ひゆく、漸頂上近く成て広々たる池ありて温泉涌あがり沸湯鎮にほとぼしる、是白山第一の地獄なり。明心立寄り見給へばあたかも阿鼻の釜湯かとあやしまる。……明心打うなづき給ひて、板をけづり筆を染、六字の名号を書てかの沸湯に投入給へば、熱湯二に成りて両方に进退て、池の中間に忽に道をあらはしたる事むかしより通へる道の如し。明心直に歩み給ふに難なく人皆順ひゆくに、波浪又犯す事なし。終に不易の道となりて往来をやすくす。各々此奇特を見て明心に帰依し、門下とぞ成り侍りし。その後幾程ならざるに道場を建立し、外には神事祭礼を全し、内には一向専修の宗風を仰ぎ奉りけり。終に寺号を恩免ありて威徳寺とぞ申ける。」

（石徹白村威徳寺、円周寺〔何れも真宗大谷派〕の明細帳に、元天台宗、嘉念坊明心によって真宗に改めたとある。〔『大野郡誌』下巻〕）

○大白川の温泉が万病に効くと聞いた一人の女性が、慢性の疾患を治そうとはるばるやってきたけれど、女人の湯あみは禁制とのことで落胆して帰途についた。入湯のため温泉に向かう明心が途上この女性に会い、心配するなと連れもどし、湯に入れた。忽ち雷電閃いて車軸の雨を降らし、大地震動して山川も崩れるばかり、俄に湯口に閃くものがあるのでふり仰ぐと、夥しい大蛇が現れて白水に乗り、怒った眼はらんと輝いた。人皆肝を潰すなかで明心は少しも驚かず、大蛇をはったと睨みすえて、「是より以後女人の入湯を明心が許す、障る事あるべからず」というと、大蛇と見えたものが何処ともなく立ち退き、雨やみ雲晴れて四方が静かになった。それより以来今の世までもこの湯に女性が入れるのは、明心の智力のお蔭といわれる。「かゝる奇代の事もおほく侍りつれば、世挙て明心は泰澄大師の再来と申せしも誠にことわりとぞ覚ゆる。」

これらの伝承の黙示するところは、明心は白山信仰の現世利益を否定することで真宗の特色を誇示しようとしたのではなく、逆に、白山を開いた「泰澄大師の再来」いわば「今泰澄」とまで語られる法力を顕示した、ということではないだろうか。のみならず、教えのうえで明心は真言宗にもまた曹洞宗にも勝ったと『岷江記』は伝えている。

○広瀬の河野に菩提院という行者がいた。真言秘密の大法を修練し、行力世の常ならずといわれたが、明心の説法を聴聞して他力易行の大道に帰依した。

○小嶋郷内林村の六郎兵衛は禅門曹洞宗の流れを汲んで多年修業に励んだが、どうしても安心を獲ることができなかった。しかし、明心の教化を受けて他力不思議の願海に入ることができた。

ここで注意しておかねばならないのは、八幡信仰とのかかわりである。八幡宮は白川村では荻町・平瀬・馬狩・鳩谷・飯島・椿原・芦倉・加須良に祭られている。平瀬を除き大郷・山家の集落である。白川北隣の五箇山はもと真言宗であったと伝え、平瀬八幡宮の右手に弘法大師が祭られていることから、白山の麓ではない大郷・山家は元来八幡一真言信仰複合とでもいうべきものが優勢であった、という仮設も成り立たぬわけではない。

荻町明善寺はもと天台宗であったといわれるが、在所の八幡宮との関係が深く、「もと内ヶ戸村の道場にいた学徳すぐれた人に村民の帰依するもの多く、元禄の頃荻町に迎えられて八幡宮の別当仙光院の坊守をしていたが、本覚寺の開基仏をもらい受けて盛に真宗の教を説いた。」(『白川村史』)という。また、鳩谷法蓮寺ももと長滝寺の下寺であったと伝えられるが、在所の八幡神社の由緒に、嘉念坊九世明教子亀寿丸が「難をのがれて越前にかくれ御成長の後御誕生の地の鳩谷に御還御になり、永正年間当神社を創建、更に文亀年中御再興になりし由、鳩谷の法蓮寺加古帳と称するものに記録あり。」(『白川村史』)という。いずれも、白山信仰よりは八幡信仰との係わりを伝えている。善俊が白山信仰の濃厚な中切以南を避けて大郷に布教の拠点を定めたと仮定し、したがって中野に拠点を移した明心に至って白山信仰との対決を迫られたと推測することも、不可能ではない。

6. 嘉念坊がうちだした真宗教義と葬送儀礼の特色

長滝寺の僧徒は春まわりには豊作と無病息災と村中安全の祈禱をし、秋まわりには村々の祭りの祭司となったことであろう。年間の食糧確保と災厄からの安全が最大の関心事であった当時の人々にとって、招福攘災の現世利益は大きな魅力であり、天台系白山信仰はこれに应运してきたのである。しかし、生活条件がいかに酷薄であっても、人間にとって「もの」だけが関心のすべてではない。酷薄な生活条件のもとでは不如意なことばかりであり、不条理なこと理不尽なことも少なくない。誰でも経験するもっとも理不尽な出来事は、愛する人の死である。とりわけ、幼い子、若い母、壮年の子あるいは父の死は、親にとり子にとってこの上もない悲嘆であるばかりでなく、不幸の源であった。ここにこころの癒しが求められる。善俊はおそらく念仏による極楽往生の信心を説いて、初めて白川郷に来世を望む信仰をもたらし、悲嘆に沈むところを癒す道を開いた。明心は蓮如の教説によってこの信心を分かりやすく説き、白山信仰との対決にうち克って、これを超える地位を確立したのであろう。

真宗の教えの跡は盆踊り唄「さかた」にみることができる。村人は盆には家々で寺や先祖の墓に参り、夜は盆踊りで楽しんだ。そのさいよく踊られた踊りの一つが「さかた」である。幸い『白川村史』にその詞が記録されているので、少し長いが引用しておく。

さても／みなみなよく聞きなさりよ　浮世のいわれを／ちよいと語りましょう
 とかく浮世の／はかない事は　風にともしび／電光ちょう露
 夢じゃうつつじゃ／たゞまぼろしじゃ　若く達者で働くとても
 しばし許さぬ／無常の嵐　心地性根の／確かなうちに
 とくと聞かんせ／大事のいわれ　弥陀の浄土は／とう門開き
 今や今やと／待ちわび給う　急ぎ行きましよ／さあ参ろうぞえ
 いざや聞きましよ／死んでの後を
 七宝（十方？）浄土は／数々あれど　弥陀の浄土は越えすぐれたり
 たとえ在家の／農民なりと　きこり炭焼／しづ山がらも
 大工／木挽／樵人なりと　桶屋いもの師／ほり（彫りもの師？）まき絵師も
 沖の舟のり／りょうすなどりも　罪もされし（罪障？）も／かかえたながら
 たった一念／帰命の念に　浄土参りの／摂取の利益
 これは如何なの／不思議ぞなれば
 阿弥陀如来は／我等のために　久遠無量の／その昔より
 種々に／お心くだかせ給い　長い事かな／ばんじゃく（判釈？）／五こく（五劫？）
 しゅういざせん／御工夫ありて　音に聞えし／ごう河の川の
 砂の数ほど／御身をつくし　四十八願／立てさせ給い
 殊にすぐれて／第十八の　十方衆生と／誓いを立てて
 頼む衆生が／助からずんば　弥陀といわれじ／正覚とらじ
 えんじ満足／無量の願行　成就なされた／南無阿弥陀仏
 あだに聞くなよ／打ち驚ろけや　もしも／おいわれ聞き損なえば
 無量永劫／浮べはしない

「さかた」の詞のなかの語句から連想されるのは、文明3（1471）年12月18日付け本願寺蓮如のお文である。曰く、

まず当流の安心のおもむきは、あながちにわがこゝろのわろきをもまた妄念妄執のこゝろのおこるをもとゞめよといふにもあらず。たゞあきなひをもし、奉公をもせよ、獵すなどりをもせよ。かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬるあさましき我等ごときのいたづらものをたすけんと、ちかひまします弥陀如来の本願にてましますぞ、とふかく信じて、一心にふたごゝろなく弥陀一仏の悲願にすがりて、たすけましますとおもふこゝろの一念の信まことなれば、かならず如来の御たすけにあづかるものなり。……（稲葉昌丸編『蓮

如上人遺文』法蔵館，昭12)

阿弥陀如来の御たすけにあづかって浄土参りをさせていただくためには、長滝寺の僧のように出家して修業を積まなければならぬわけではない。在家のまま、農民・木こり・炭焼などの姿のまま、あさましい罪業に朝夕迷う姿のままで、ただ一心にふたごころなく弥陀一仏の悲願にすがるとき、間違いなく御たすけにあづかることができるという蓮如ばりの説き口が、盆踊り唄「さかた」に影を落としている。そのなかに彫り師・蒔絵師から舟乗り・漁師まで言及されているところをみても、「さかた」は白川郷で作られたものではなく、おそらく北隣の越中からもたらされたと考えられる。それに、踊りに合わせて早口で語られる文句の意味がどれほど聞く人の心にしみ渡ったものか、その効果のほどを大きく見積もってはならないだろう。しかし、白川郷でどんな教えが説かれていたかを推測する手がかりには、なるのではあるまいか。

人の死について蓮如は、

……朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。すでに无常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこたちまちにとぢ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて桃李のよそをいをうしなひぬるときは、六親眷属あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。……されば、人間のはかなき事は、老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまひらせて、念仏まふすべきものなり。(『同上』)

という有名な「白骨のお文」を残した。このお文が読まれるのは葬送のさいであるが、嘉念坊は白川郷の葬送儀礼に大きな革新をもたらし、如来を一心に信ずる者は必ず救われるという教えを、目で見える形で示したのである。

民俗学者・柳田国男が「毛坊主考」(大3)で引用した『笈埃随筆』卷二「飛驒里」の条に、

当国に毛坊主とて俗人でありながら村に死亡の者あれば導師と成りて弔ふなり、……葬礼斎非事には麻上下を着して導師の勤を為し、平僧に准じて野郎頭にて亡者を取置するは、片鄙ながらいと珍らし、……

とある。「毛坊主」とは「お剃刀」と呼ばれる略式得度をへた程度の准平僧で、近世には珍しい存在ではなく、近江・丹波その他で断片的ながら存在が記録されている外、『大谷本願寺通記』(巻一三、巻末)に「有俗形兼称俗名法名而司寺務者。世称毛坊主。」とあり、『紫雲殿由縁記』には「蓮実証ノ三代ノ間寺ト云モノ其数知レテ少々、坊号俗名同行頭皆々所謂畑田守り、今ニ云毛坊主。」とあるとおりである。

飛驒では毛坊主が葬送の儀礼を司った。明治4(1871)年9月編成の戸籍に、加須良蓮受寺五世の円城は「於当寺得度」とある(『白川村史』)。得度というがこれでは「お剃刀」にも及ばない。荻町明善寺は本山で得度を受けたが、これは慶応2(1866)年飛檐から余間への

寺格昇格による例外であったようである。『笈埃随筆』は飛騨では毛坊主が葬送儀礼を司ったことを伝えるだけで、取置きの方については全くふれていない。思うに、開基仏として本山から道場に授与された絵像を掲げて通夜を修し、また野辺送りをしたことであろう。俗人の毛坊主でも葬送儀礼を主導できたのは、開基仏を奉持するからである。絵像開基仏こそ、「罪もされしもかかえたながら浄土参りの摂取の利益」を実感させるものであった。この儀礼を葬送の核とする一大革新によって、嘉念坊は白山の現世信仰の地盤をうがって村人の心に食い込むことができたと推測される。

毛坊主による取置きに対応するのは、高山でキリボンがすんで間もなく白川郷を訪れる照蓮寺（高山御坊）の御回檀なる行事である。御回檀には、御坊の役僧が照蓮寺の絵像本尊を奉持して中野支院（心行坊）に來たり、前年の回檀以来の死者の供養を勤め、年忌を修し、寄進を集めた。明治以後は村々の寺にもおおむね正式の僧侶が住持して葬送儀礼を主導するようになったため、御回檀の意味に変化が生じたと考えられる。神社の秋祭よりも先に巡ってくる御回檀には、村人は労働を休んで寺に参り、境内に店を出す商人から物を買ったりして、楽しんだ（『白川村史』。「御回檀踊り」もあったそうで、その詞が記録されている（『高山別院史』上巻）。

踊らまいかよ中野の御坊で／千重のつつじをなかにして
盆にやござらずまつりにやみえず／ござれ今年のご回檀に
年に一度の回檀さまに／参らせんよな親たちじゃ（そんな親の娘は嫁にもらえない）

7. 飛騨の毛坊主とその社会的地位

毛坊主は最下級の准平僧であって葬送に関与するところから、一種の賤民ではなかったかと疑う人もあるかもしれない。白川郷の真宗を担った毛坊主は、一体どのような社会的地位の人々であったのだろうか。『笈埃随筆』の先に引用を省いた箇所の記事はまさにこの点に係わるものであって、「筋目ある長百姓として田畑の高を持ち」と明記している。

訳知らぬ者は常の百姓よりは一階劣りて縁組などせずと云へるは僻事なり、此者ども何れの村にても筋目ある長百姓として田畑の高を持ち、俗人とは云へど出家の役を勤むる身なれば、予め学問もし経文をも読み、形状物体筆算までも備らざれば人も帰伏せず勤まり難し、即ち[7カ寺の名を挙げたうえで]、右の四箇寺は中頃より東本願寺末派として寺号を呼ぶといへども、住持は皆俗人にして別名あり、始の三人は寺号無ければ何右衛門寺又は何太夫寺と称し、同じく亡者の弔い祖先の斎非事をつとむ、居宅の様子門の構寺院に変わることなし、……

毛坊主の社会的地位を点検するに当たり、まず、彼らは自らどう名乗り、また彼らの居宅がどう呼ばれたかを確認しておこう。毛坊主は宗門むきには法名があれば法名を称し、地方行政むきには俗名を称したと考えられる。彼らは自らの居宅を真宗の道場とした。いわゆる「自庵」である。道場は寺号があれば寺号で呼ばれたが、なければ俗道場と記録され、道場主の俗名もしくは法名を付して〇〇道場と呼ばれた。白川村各集落所在の寺がかつてどう呼ばれたかを、『飛州志』（1739～45年 編）と『斐太後風土記』（1873年 脱稿）によって示すと、つぎのとおりである。道場（寺）番号は、所在村同定の便宜のために付した。

村名	『飛州志』『斐太後風土記』	
①尾神	俗道場	称名寺
②平瀬	俗道場	常德寺
③長瀬	浄楽寺	浄楽寺（検地名請 道場弥右衛門） 小字稗田の5戸はみな寺の分家とのこと（小山隆）
④馬狩	俗道場	信称寺
⑤野谷	俗道場	浄蓮寺（検地名請 道場四郎左衛門）
⑥荻町	本覚寺	本覚寺（検地名請 本覚寺）
⑦	俗道場（内ヶ戸）	明善寺（検地名請 道場玄西）
⑧鳩谷	法蓮寺	法蓮寺（検地名請 本覚坊）
⑨飯島	俗道場	教勝寺（検地名請 道場與次右衛門）
⑩加須良	俗道場	蓮受寺（検地名請 道場五郎右衛門）
⑪椿原	俗道場	斎入寺
⑫小白川	俗道場	蓮光寺

『飛州志』がしきりに用いる「俗道場」なる語について、「凡俗道場ハ其寺主俗体ナルヲ云フ」といい、「寺号或ハ坊号ヲ称スル中ニ其主俗体ニシテ法用ヲ務ム村里ニ檀家ノ民アツテ代々相続スルヲ俗道場ト云フ也或ハ毛坊主トモ云ヘリ道場ハ宗旨（東西本願寺宗）ノ通称タリ」とも言っているのが参考になる。毛坊主が主管する道場が俗道場であった。

では、毛坊主の経済的行政的地位はどのようなものであったか。まず、宝永3年「白川郷二十一ヶ村草高寄帳」（ただし天領諸村のみ書き上げ）に記載された該当事項をまとめてみれば、つぎのとおり。

④馬狩村与左衛門は信称寺のこと。

草高は家抱の分を合わせて村3軒中最大の3石2斗5升余。

⑤野谷村四郎左衛門は浄蓮寺のこと。

村唯一の百姓。高持の家抱をもち、草高9斗4升余、外に垣内引き5斗余。

⑥荻町村平吉は本覚寺のこと。

草高は村18軒中最大の12石4斗1升余，外に垣内引き1石2斗余。

⑧鳩谷村半九郎は法蓮寺のこと。

草高は村8軒中2番の13石2升余，外に飯島村入作2石2斗4升余，垣内引き1石1斗5升余。

⑨飯嶋村与左衛門は教勝寺のこと。

草高は村29軒中3番の10石1斗7升，外に垣内引き1石余。

⑦内ヶ戸村助市は明善寺のことか？

草高は村2軒中2番の5斗6升余。

⑩加須良村五郎右衛門は蓮受寺のこと。

草高は家抱の分を合わせて村3軒中2番の5斗8升余。村の草分という（『白川村史』）

上の文中の家抱（けほう）について、『飛州志』は「是元来民ノ僕タルモノ別家ニ出テ民ト成ル然レドモ誰家抱ト号シテ古来一戸ノ民ニハアラザル也」と解説している。隸従戸である。毛坊主のなかには隸従戸をもつ高持百姓がいたのである。

毛坊主によって維持されてきた白川郷の真宗の寺は，半農半僧というより僧を兼業とするような生活形態をとり，牛馬を飼い，宝永の草高寄帳が例示するように，平均以上の大きい規模の耕作をするものが多かった。平瀬の常德寺など，平瀬7戸のうち共有山への入会権がもっとも大きく（常德寺3人，坂本2人，他の5戸それぞれ1人），居村中へ農休みを指令する権能をもっていた。営農の必要上一代おきに僧になり，中間の世代はもっぱら農耕に従事した例が，長瀬の浄楽寺や平瀬の常德寺にあり，馬狩の信称寺にもこのしきたりがあったという。明治4年の戸籍によると，加須良の蓮受寺では28歳の住持の叔父が五郎右衛門を称して66歳でなお営農を担当した（『白川村史』）。

簡単ながら経済的地位をうかがったので，つぎに行政的地位を探ってみよう。まず，安永3（1774）年「新田検地帳」（天領寺領とも）に案内人として挙げられた下記の百姓は，みな毛坊主である。すなわち①尾神村六郎右衛門（案内人3人のうち），②平瀬村作左衛門（2人のうち），⑤野谷村四郎左衛門（2人のうち），⑧鳩谷村半九郎（4人のうち）。

つぎに，安永4（1775）年の高山御坊あて七分増免請書に署名した寺領村役9名中の，中野村名主源右衛門は光輪寺，①尾神村与頭六郎右衛門は称名寺，⑩椿原村惣代長吉は齊入寺，⑫小白川村与頭彦右衛門は蓮光寺であった。

第3に，天保14（1843）年の山絵図に署名した村役を，照蓮寺領の村々と天領の村々に分けて掲げる。（ただし，真宗寺院のある村のみ掲出。）まず寺領では，名主の中野村源右衛門は光輪寺，①尾神村百姓代六郎右衛門は称名寺（名主は他村から），②平瀬村百姓代作左衛門は常德寺（名主・組頭は他村から），⑦荻町村組頭与助は寺元（名主は他村から），椿原村は

不詳（名主・山見は他村から）、⑫小白川村組頭彦右衛門は蓮光寺（名主・山見は他村から）である。つぎに天領（名主は牧戸村久左衛門）では、③長瀬村組頭弥右衛門は浄楽寺（名主は他村から）、④馬狩村百姓代与左衛門は信称寺（名主・組頭・山見は他村から）、⑤野谷村百姓代四郎左衛門は浄蓮寺（名主・組頭・山見は他村から）、荻町村は不詳（名主は他村から）、鳩谷村も不詳（名主・山見は他村から）、⑨飯嶋村百姓代与左衛門は敬勝寺（名主・組頭は他村から）、⑦内ヶ戸村百姓代助市は明善寺か（名主・組頭・山見は他村から）、加須良村百姓代は蓮受寺と並ぶ百姓（名主・組頭・山見は他村から）であった。

以上の史料が明らかにするところは、白川郷の毛坊主は真宗の信心があることを前提として、持高の大きい百姓であり、村役を担当する重立であったことである。したがって、生活の余裕もあってなにほどこかの学問もし、村民から敬意と信頼を寄せられる家筋であったことであろう。そういう家筋が嘉念坊の教えを受けとめ、居宅を道場として真宗の地区拠点となったのである。

8. 開基仏授与と木仏・寺号授与の年代

道場の成長をみるときの着眼点は、開基仏授与の年代と木仏・寺号授与の年代である。すでにふれたとおり、開基仏は絵像である。木仏本尊の授与が寺号授与の条件であったと考えられ、ふつう同時に授与された。下に白川村12カ寺についてこれらの時点を一覧にし、比較のため中野村照蓮寺（のちの高山御坊）のデータを附記した（括弧内は本山法主の世代と法名、西は西本願寺、それ以外は東本願寺）。

村名	寺名	開基仏授与年代	授与先	木仏・寺号授与年代
中野	照蓮寺	?		1498(9実如)
①尾神	称名寺	1489～1515(9実如)	牧戸村休円	1738(17真如)
②平瀬	常德寺	1490～1522(9実如)		1741(17真如)
③長瀬	浄楽寺	1499～1536(9実如～10証如)	モリモ村浄西	1725(17真如)
④馬狩	信称寺	1623～1657(13宣如)	西円	1745(18従如)
⑤野谷	浄蓮寺	1501～1536(9実如～10証如)	保木脇浄西	1741(17真如)
⑥荻町	本覚寺	1681～1684(西14寂如)		1694(西14寂如)
⑦荻町	明善寺	内ヶ戸在住時代	玄西	1744(18従如)
⑧鳩谷	法蓮寺	1502～1503(9実如)	勝歎	1705～1712(17真如)
⑨飯島	敬勝寺	1501～1505(9実如)	浄了	1745(18従如)
⑩加須良	蓮受寺	1501～1503(9実如)	明道	1760(19乗如)
⑪椿原	齊入寺	1504～1511(9実如)	西円	1745(18従如)

⑫小白川蓮光寺 1398～1500(6 巧如～9 実如) 荻町? 1745(18従如)

以上12カ寺のうち嘉念坊白川善俊門徒が9カ寺(⑥は西本願寺末, ⑨は越中八尾本教寺末, ⑩は金沢小立野慶恩寺末)であるが, 嘉念坊十世明心代に, 開基仏, つまり方便法身像とも大品御本尊とも呼ばれる絵像を授与され, 道場から寺院成りの歩みを始めたものがそのうちの6カ寺, それより早いと思われるものが1カ寺⑫, それより遅かったものが1カ寺④, 不詳1カ寺⑦となる。中野村を本拠とした明心代に, 嘉念坊教団が急速に成長したことが察せられよう。

絵像を授与される前に名号の時代があった。道場用の大型の名号を授与された時に道場となるのであるから, 嘉念坊教団の実質的な形成は開基仏以前の名号時代に求めなければならない。それは内ヶ島一族が危機感を抱いて襲撃を加えるに至る時代, つまり八世明誓から九世明教の約70年間のことであったのではないだろうか。

第二次開基ともいべき木仏・寺号の授与は, 開基仏授与からかれこれ200年経ってからのことである。木仏・寺号の下付を乞うための条件が, この間にどのように整ったのであろうか。村落内の生活の展開については知る術がないが, 白川郷の真宗道場を取り巻く教団環境は大きく変わりつつあった。特筆すべきは, 中野にあった照蓮寺が高山城下へ移転し(1588～89年), やがて嘉念坊の血筋が絶えて, 照蓮寺が本山掛所として召しあげられたことである(1703年)。本山による照蓮寺召上げおよびその後の掛所の処置を不満として, 吉城郡古川の名刹真宗寺と本光寺が宝永2(1705)年西派に走った。照蓮寺廃絶にたいする地元の不満を逸らすためか, その後すぐに寺号の授与が始まり, 50年を経ずして, 開基仏の授与が遅かった④と開基仏授与の年代不詳の⑦を含むすべての道場が, 寺号を授与された。しかし, 元禄5(1692)年に新寺の創立が全く禁止されていたから, 本山から許可された寺号も領主からは公認されない私称に止まり, 先に挙げた地方史料が示すように, 道場主の公的活動は依然として俗名で行われたのである。

白川村12カ寺中例外的に西派に属する⑥荻町本覚寺は, 第一次および第二次開基の一般傾向のなかでも例外であった。戸数のごく少ない集落が庄川に沿うて点在する白川郷で, 荻町は例外的に戸数が多かったが, 東派の明善寺と西派の本覚寺と1村に2カ寺ある点において異色であり, しかもここだけが天領と寺領の双方を含んでいた。天領百姓と寺領百姓に分かれ, 東西2派の2カ寺があり, 開基仏授与が飛び抜けて遅かった本覚寺が寺号授与では飛び抜けて早かったこと, 以上3点は関連していた。この関連性を追究することは, 近世白川郷の宗教生活にメスを入れる格好の切り口である。しかし, 白山信仰を特色とするこの土地に嘉念坊教団が確固たる足場を据えることがどうしてできたのか, その鍵の解明を主な目的とする今回の報告はこの辺で幕を下ろすこととし, 荻町本覚寺の成立と展開の問題や, 照蓮寺

がなぜ本願寺教如に組みして東派となったかの問題は、今後の研究課題として指摘するに留めたい。

(「白川郷文化フォーラム」での報告，於白川村コミュニティ会館，1995.11.12)

Invasion and Expansion of the Shin Buddhist Sect in Hida Province

With Special Reference to the Shin Sect Temples in Shirakawa

Kiyomi MORIOKA

People in Shirakawa County had been under a dominant influence of Chōryūji Temple of Tendai Buddhist sect located in a neighboring county, and, at the same time, they worshipped the spirit of Mt. Hakusan rising high along the western border of the county. In the 13th century, a Shin Buddhist monk named Zenshun visited Shirakawa to propagate the faith in Amitabha among the villagers and settled there down finally setting up a shrine known in the name of Kanenbō.

After patient mission works by his descendants for two and a half centuries, the tenth generation monk called Meishin saw an era of rapid expansion. He succeeded in proselytizing activities and came to claim as many as 43 branch shrines in Shirakawa and other counties in Hida Province. The present paper attempts to elucidate the factors which made the new mode of Buddhist faith acceptable and even attractive to villagers preoccupied with a Tendai-Hakusan configuration of rituals oriented toward this-worldly benefits.

It is told that Meishin displayed a magical power exceeding that of Tendai or Hakusan priests. In addition, he provided the villagers with a new set of teachings and rituals with an emphasis on other-worldly salvation which consoled and comforted them suffering from repeated misfortunes of poor harvest, disasters, and particularly untimely deaths of close kin including young children and young mothers. He learned the new system of Shin Buddhism from disciples of Rennyo, the eighth abbot of Honganji Temple, and brought it into Shirakawa and neighboring counties. It is assumed that a series of memorial services for the dead was developed to meet the psychological need of bereaved families, and made the victory of Meishin over Tendai-Hakusan priests decisive.